三重県埋蔵文化財調査報告　166－3

平成９年度土地改良総合整備事業に伴う

笹遺跡発掘調査報告

――一志郡一志町井生――

１９９９・３

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、三重県一志郡一志町井生に所在する笹遺跡の発掘調査結果をまとめたもので、平成９年度県営土地改良総合整備事業に係る発掘調査報告書である。

2　本調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部より執行委任を受けて、平成９年度県営土地改良総合整備事業に伴って実施し、調査費用は、その一部を国庫補助金を受け三重県教育委員会が、他を三重県農林水産部と地元市町村が負担した。

3　調査の体制は以下のとおりである。

調　査　主　体	三重県教育委員会
調　査　担　当	三重県埋蔵文化財センター
	調査第一課　　主事　　中川　明
調　査　期　間	平成９年11月10日～平成９年12月15日

4　調査にあたっては、三重県農林水産部農地整備課、津農林水産事務所、井生地区改良区、一志町教育委員会および地元の方々に協力をいただいた。また、参考資料を小田光夫氏より借用した。

5　発掘調査後の遺物整理は、上記担当者のほか、資料普及グループ職員が補助した。

6　本書の執筆、編集および遺物写真撮影は、中川が担当した。遺物実測およびトレースは資料普及グループ職員が補助した。

7　本書で示す方位はすべて真北を用いた。なお、磁北は６°20′西偏（平成６年10月）している。

8　本文で用いた遺構表示略記号は、下記の通りである。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：自然流路、溝　　ＳＫ：土坑　　Pit　：柱穴、小穴

9　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

10　写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の契機 …… (1)
　1　契機 …… (1)
　2　調査の経緯 …… (1)
Ⅱ　位置と環境 …… (2)
　1　位置と地形 …… (2)
　2　歴史的環境 …… (2)
Ⅲ　基本的層序と遺構 …… (4)
　1　層序 …… (4)
　2　遺構 …… (4)
Ⅳ　遺　　物 …… (7)
Ⅴ　調査のまとめ …… (9)

挿　図　目　次

第1図　遺跡位置図 …… (2)
第2図　調査区位置図 …… (3)
第3図　地区割図・遺構平面図 …… (4)
第4図　土層断面図 …… (5)
第5図　ＳＫ10、ＳＢ11・12実測図 …… (6)
第6図　出土遺物実測図 …… (8)

表　目　次

第1表　出土遺物観察表 …… (10)

図　版　目　次

ＰＬ　1　調査区東半部（西から）　弥生土器壺　出土遺物

Ⅰ　調査の契機

1　契　　機

笹遺跡は、一志郡一志町井生に所在する。一志町の遺跡番号20の周知の遺跡である。本調査は、平成９年度土地改良総合整備事業に伴って実施するものである。調査に先立って、平成10年度の事業照会を受けて平成８年２月に、試掘調査を実施した。その結果、当遺跡で小穴、土坑から土師器、瓦器椀、山茶椀、笠月遺跡では、土師器甕・鉢、高畑遺跡では灰釉陶器椀、山茶椀が確認された。このことから古代から中世にかけての遺構が付近一帯に広がることが明らかになった。

これを受けて、県農林水産部と文化財保護の協議を重ねてきた。その結果、東西に縦貫する農道部分の路床改良が遺構面に及ぶため、滅失する部分について本調査を実施することになった。

2　調査の経緯

(1)　調査の行程

調査は、遺跡面積約6,000㎡のうち当事業により削平される410㎡について実施した。調査期間は平成９年11月10日～同年12月15日の20日間である。

調査日誌(抄)

11月10日　重機による表土掘削開始。
11月12日　表土掘削終了。
11月18日　作業開始。北壁土層断面図作成準備。
11月20日　トレンチ掘削。土層断面図作成。12～15列グリッド遺構検出。
11月21日　15列グリッド黒褐色土上で弥生土器散布。
11月25日　Ｂ区21グリッドで弥生土器出土。
11月28日　22～25列グリッド掘削、検出。
12月２日　14～16列グリッド再検出。土層断面図作成続行。
12月３日　14列の掘立柱建物検討。遺構平面図作成準備。
12月５日　ローリングタワー設営。遺構写真撮影。
12月10日　遺構平面図作成続行。
12月12日　遺構レベル測定。
12月15日　５～10列グリッド断ち割り。
　　発掘用具片付け。作業員終了。

(2)　調査の方法

Ａ　調査区の設定

調査区は、現農道のセンターラインを基軸に４×４ｍのメッシュに区切り、東から西に１～29の番号を、南から北にＡ～Ｂのアルファベットを与えた。これをグリッド名で呼称した。

Ｂ　遺構図面について

調査区全体の平面図は縮尺１／20で作成した。土層断面図も同縮尺を用いた。

Ｃ　掘削について

掘削方法は、表土・旧耕作土を重機で、包含層以下、遺構までを人力で行った。なお、調査を補助していただいたのは、井生地区在住の方々である。記して感謝します。

青木忍、青木ハナ子、伊勢野傳、川尻厚巳、須藤英太郎、田中兄男、中山アサカ、服部文子、藤岡計治、平山悟、山岡富美子。

(3)　文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
　平成９年11月14日付教文第555号（県知事通知）
・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
　平成９年11月14日付教文第554号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
　平成10年１月29日付教埋第11-48（県教育長通知）

Ⅱ　位置と環境

1　位置と地形

雲出川は、高見山脈の一峰三峰山に源を発し、一志郡東部で波瀬川と合流する。合流地点から7km西方に笹遺跡（1）は位置する。標高は、平均33mで、周辺の水田との比高差は1m未満である。

当遺跡は、昭和45年の農業構造改善事業により整備され、桑畑から雲出川右岸段丘上に広がる水田、又は畑地と変化している。[1] 一志町、白山町においては、近年の発掘調査例は少なく、具体的な地域の歴史については解明されていない部分が多い。以下、雲出川流域に着目し、歴史を概略、記述する。

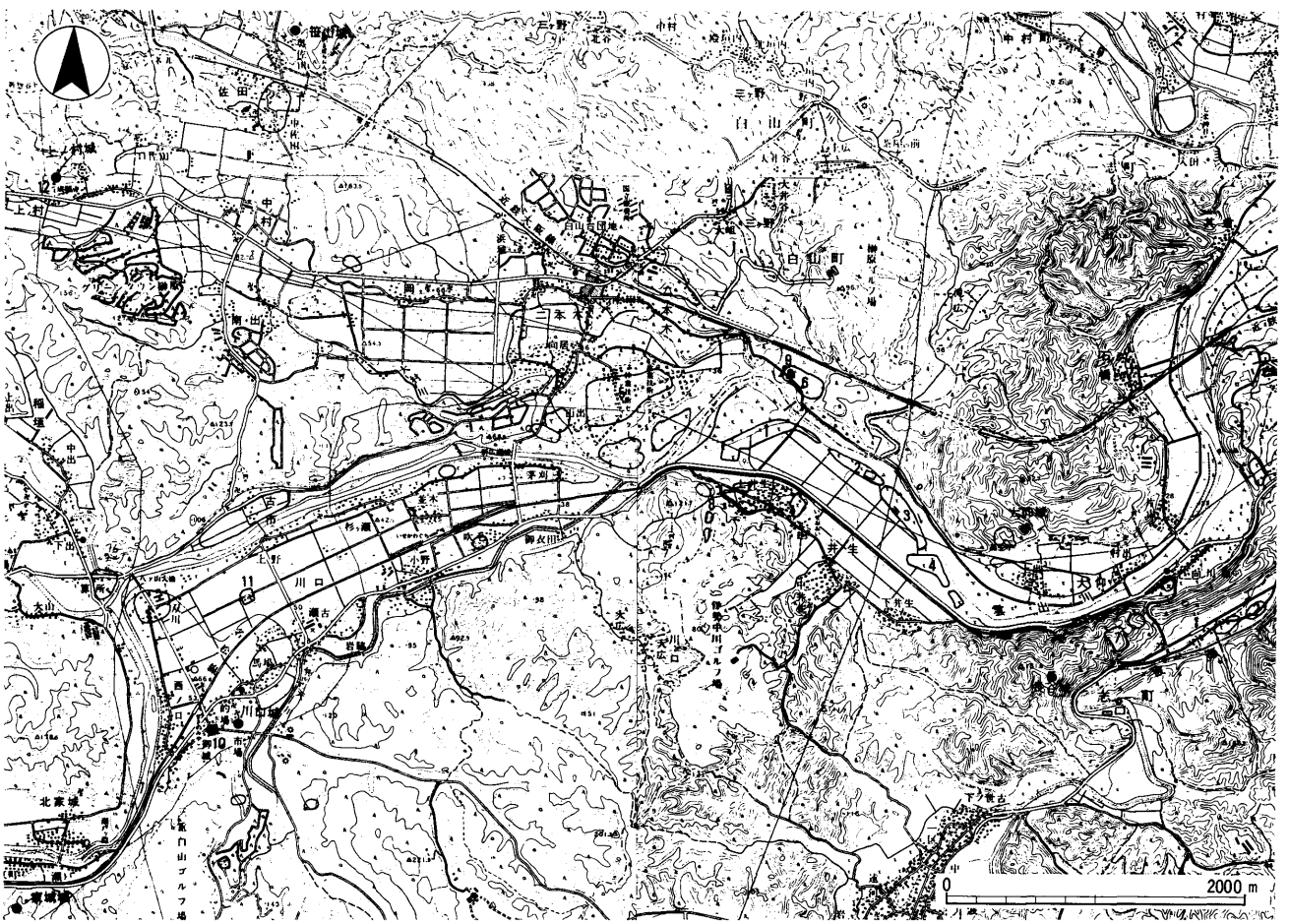
2　歴史的環境

(1)　弥生時代

弥生時代には、当地区から白山町を含む広い範囲で遺物が分布する。雲出川右岸の高畑遺跡（2）から前期新段階の土器[2]や、笠月遺跡（3）、宮ノ東遺跡（4）から中期～後期の壺が採集されている。白山町の和遅野遺跡（5）は、古墳時代まで連続する複合遺跡としても知られている。[3] 竪穴住居3棟と早期～後期の遺物が確認されている。左岸の低位丘陵に広がる白山町亀ケ広遺跡（6）では、竪穴住居3棟が確認され、弥生時代前期の壺が出土している。[4] 当代の拠点的な集落として注目される。周囲を丘陵で囲まれた小山地区でも、弥生時代中期～後期の方形周溝墓や土坑が鳥居本遺跡から検出されている。[5] どれも段丘上での弥生文化や拠点的な集落の形成過程を明らかにした事例である。

(2)　古墳時代

古墳時代に入ると、低位丘陵や雲出川の段丘平坦面にも大小様々な古墳が築造されてくる。井関地区のユガミ谷古墳群（7）は、両袖式の横穴式石室を有する古墳で、現地産の「井関石」を側壁に使用し



第1図　遺跡位置図（1：50,000）［国土地理院「大仰」「二本木」1：25,000による］

たものとして特筆される。当地区南山麓の上井生古墳群（8）では、横穴式石室を含む11基が確認された。内部から須恵器杯類等、6世紀初頭の遺物が出土している[6]。亀ケ広古墳（9）は、3基からなる群集墳で、直径が20mにおよぶ円墳が確認されている。須恵器と金環が出土している。それぞれ各地域の支配層を考える上で重要視される。

(3) 飛鳥時代～奈良時代

この時代の集落跡は、鳥居本遺跡で確認されている。6棟の竪穴住居とそれに伴う須恵器や土師器杯が出土している。文献では聖武天皇は天平年間に和遅野で狩猟を行ったり、「河口」（10）を頓宮の場所に選定し、伊勢に詣でられたと伝えられている[8]。

(4) 平安時代～鎌倉時代

南家城地区の野田浦遺跡（11）から構造的には簡素ながら竪穴住居が確認されている[9]。高野地区の寺家遺跡では掘立柱建物とそれに伴う土師器杯が出土しており、ともに庶民の生活の様子が窺える[10]。また近年、井生・大仰・高野地区の発掘調査で瓦器や黒色土器の出土例も数多く公開され、それらから畿内的な要素の一端が認められる[11]。「続日本紀」によると、平安時代、一志町は斎王群行のルートとなり、一志と川口が頓宮に選定されたとある。都への退下の道筋としては聖武天皇の逆ルートを辿ることになる[12]。「成願寺文書」（12）の天文三年条には、徳政令に関する抗争の内容が記されている。小倭郷（現白山町）の対岸にあたる井生の岸田八郎左衛門尉が老分衆からの裁許状によって森地を奪回した例が紹介されている。北畠氏の被官間で取り交わされた私徳政の一例とも言えよう[13]。

(5) 安土・桃山時代

安土・桃山時代には織豊政権が確立される。当地区も強い影響を受ける。一志郡内に配属された諸大名のうち、信長の時代に岸和田代官松浦宗清が一万石を転封され、井生を治める。居城は豊臣、徳川方の勢力が伯仲したなかでは築けなかったらしく、現在確認することはできない[14]。なお、当代以降の歴史については一志町史に詳しく記されている。

〔註〕

①「一志町のほ場整備事業」『一志町史』下巻、一志町教育委員会、昭和56年
②北田　宏他『高畑古墳発掘調査報告』一志町教育委員会、1982
③稲生進一『和遅野遺跡発掘調査報告』白山町教育委員会、1975
④「縄紋式文化時代」『白山町文化誌』白山町教育委員会、昭和48年
　大三村『一志郡史下巻』一志郡史編纂委員会、昭和30年

第2図　調査区位置図（1：5,000）［■は試掘坑］

Ⅲ　基本的層序と遺構

1　層　　序

調査区は、遺跡全体のほんの一部分に過ぎず、北端の細長い場所に設定した。現況は農道を挟んで、南側は水田、北側は狭い畑地である。既述したが、昭和45年時の農地整備により基盤層まで削平が及び、遺構全体が把握できない部分があった。南壁は側溝が通り、削平が激しく遺構、土層の観察が不明瞭であった。東半部分で観察した耕作土直下の青灰色土は旧耕作土と判断した。以下、基本的な層序を順に記述する。

第１層：茶褐色土

第２層：青灰色土（東半部の耕作土）

第３層：褐色土

第４層：黄褐色土（基盤層）

第５層：黒褐色土

2　遺　　構

今回の調査では、弥生時代中期、および鎌倉時代から室町時代の遺構を確認した。掘立柱建物、土坑と溝が中心である。時代順に以下、記述する。

（１）弥生時代の遺構

Ａ　土坑

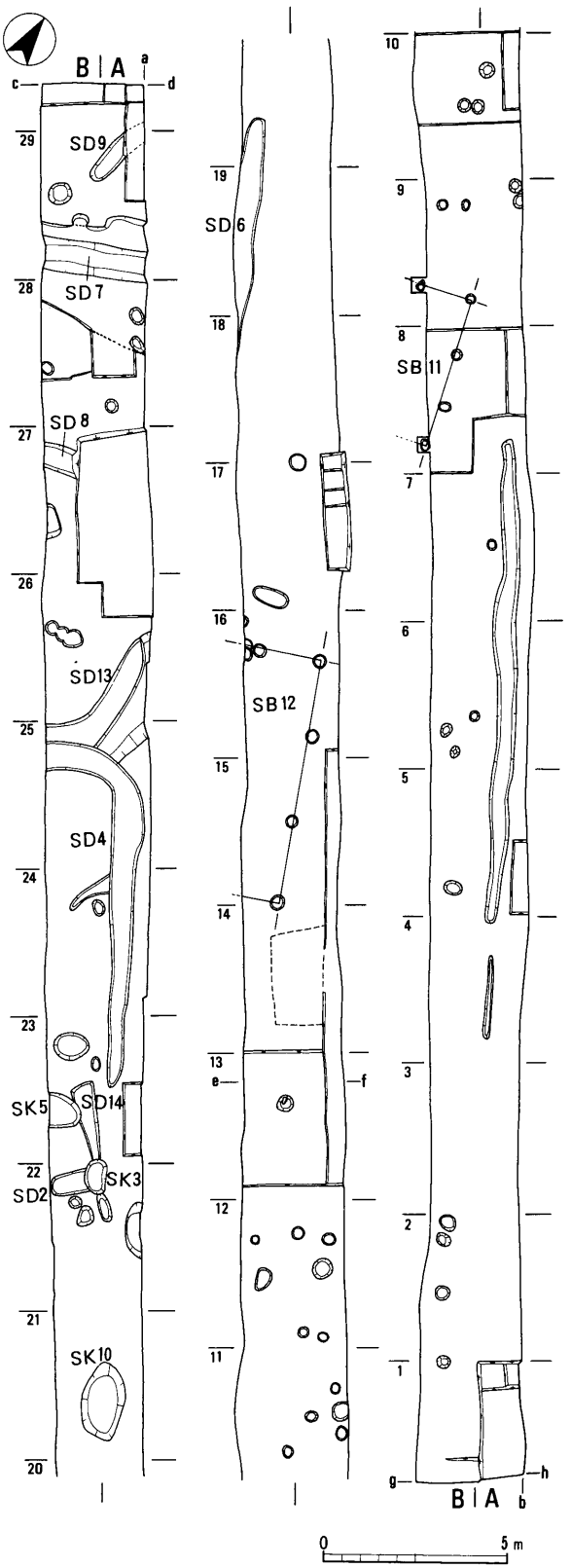
ＳＫ10（第５図）　Ａ列16グリッドで検出した。縦2.1ｍ、横1.2ｍ、深さ40㎝の楕円形の遺構である。検出面の層位が漸移的で不明瞭であった。茶褐色の埋土から弥生土器壺（図28）が完形で出土した。

（２）鎌倉時代～室町時代の遺構

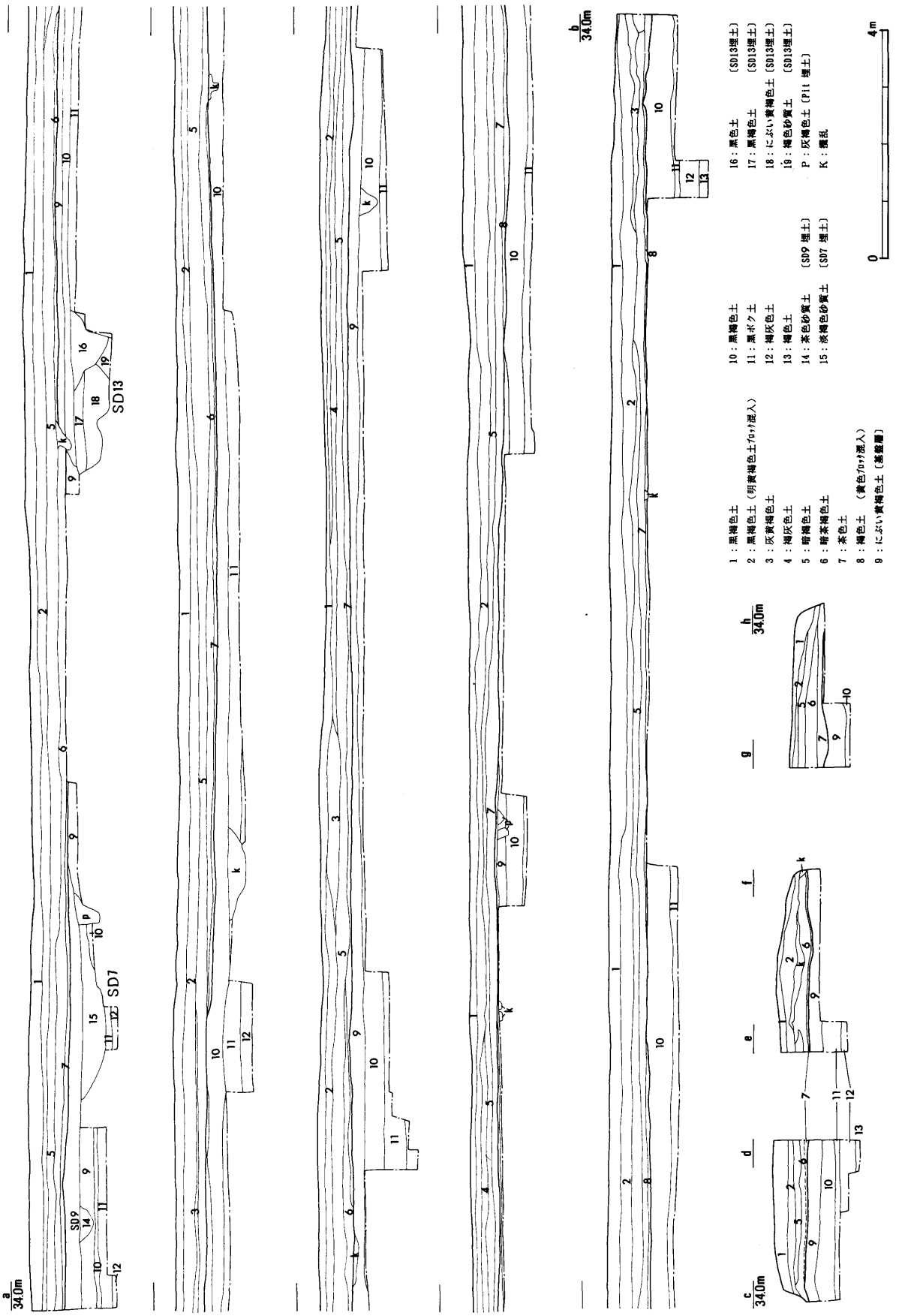
Ａ　掘立柱建物

ＳＢ12（第５図）　Ａ・Ｂ列12～14グリッドで検出した。東西３間、南北１間以上の建物である。棟方向はＮ25°Ｗを示す。柱間寸法は、桁行、梁行ともに1.5ｍの等間である。建物の半分は調査区外へ広がる。遺構から15世紀末の南伊勢系土師器が出土している。

ＳＢ11（第５図）　Ｂ列７～８グリッドで検出した。東西３間、南北１間以上の建物である。棟方向はＮ20°Ｗを示す。柱間寸法は、桁行、梁行ともに2.1ｍ



第３図　地区割図・遺構平面図（1：200）



第4図　土層断面図（1：100）

の等間である。建物の半分は調査区外へ広がる。柱掘形は径30cmの後の円形である。時期は不明であるが、ＳＢ12と方向や埋土が同一であることから同時期の遺構であるとみられる。

Ｂ　溝

ＳＤ４　Ａ・Ｂ区23～25グリッドで検出した。Ｌ字形に屈曲して流れる溝である。最大幅0.8ｍ、深さ30cmの屈曲部でＳＤ13と重複する。流路の方向及び埋土の状況からＳＤ６に接合する溝である。

ＳＤ６　Ｂ区18～19グリッドで検出した。幅0.6ｍ、深さ15cmである。東方は調査区外へ広がる溝である。西端は、ＳＤ４と接合する遺構であると考えられる。

ＳＤ７　Ａ・Ｂ区28～29グリッドで検出した。調査区を南北に横断する溝である。最大幅3.8ｍ、深さ70cmの遺構である。暗褐色土の埋土から12世紀末の山茶椀が出土している。

ＳＤ８　ＳＤ７と同方向の溝である。北半分は削平を受けている。幅0.7ｍ、深さ30cmの遺構である。遺物は小片で詳細は不明であるが、ＳＤ７と同時期の遺構であろう。

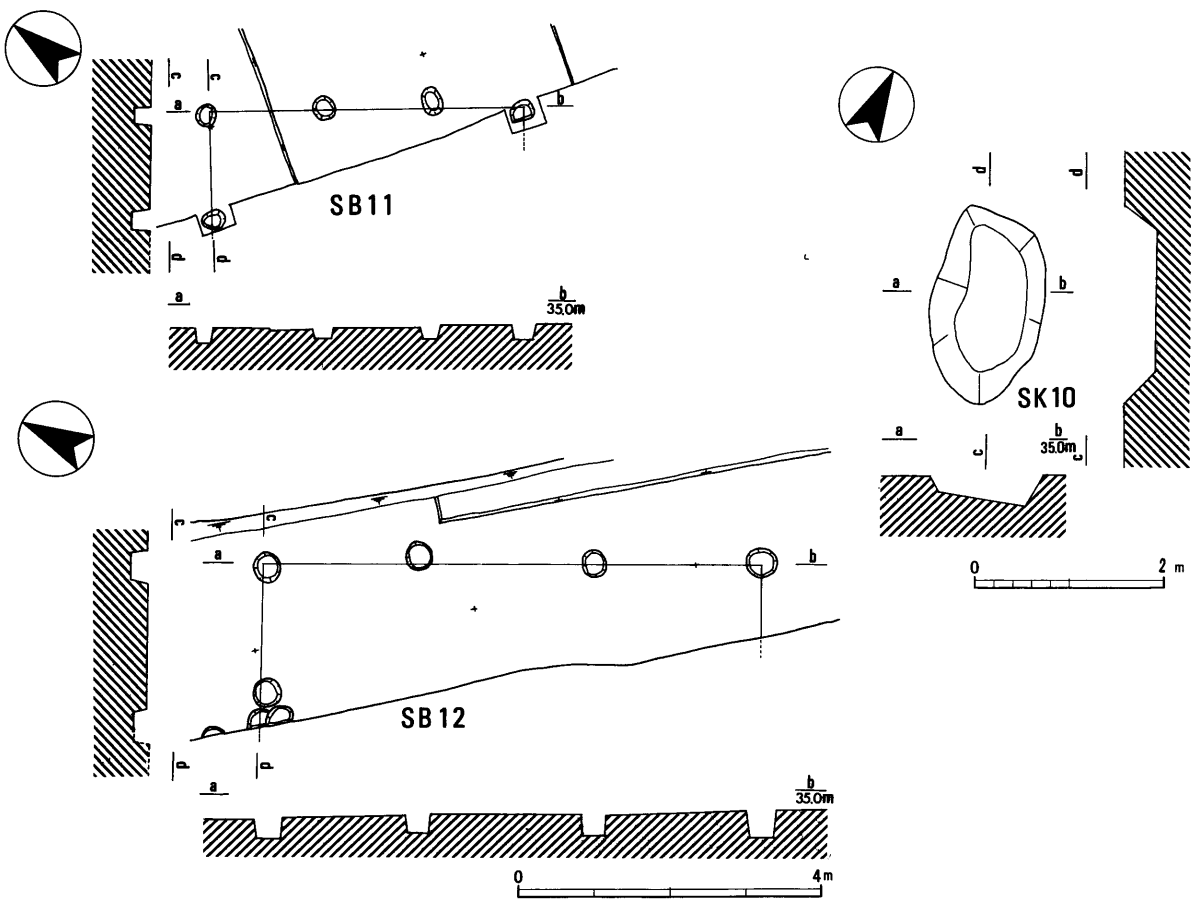
ＳＤ９　調査区外へ流れる溝である。幅0.4ｍ、深さ20cmの浅い遺構である。ＳＤ８に比べやや南に振るが同時期の遺構である。

ＳＤ13　Ａ・Ｂ区25～26グリッドで検出した。ＳＤ４に重複する北壁付近は急に深くなり、埋土も黒褐色に一変している。ＳＤ４と同経路で調査区に流入したかと考えられる。

Ｃ　土坑

ＳＫ３　Ａ・Ｂ区22・23グリッドで検出した。縦１ｍ、横0.8ｍ、深さ40cmの遺構である。ＳＤ２及びＳＤ14の合流地点に掘られた遺構である。

ＳＫ５　Ｂ区23グリッドで検出した。東西1.4ｍ、南北1.2ｍ以上、深さ50cmの、半分は、南側へ広がる。



第５図　ＳＫ10、ＳＢ11・12実測図　（ＳＫ10は1：80、他は1：100）

Ⅳ 遺　　物

調査区全体から出土した遺物はコンテナバットで8箱である。遺構出土の遺物は全体の2割程であった。遺構は不明瞭であったが、第3層で純粋な弥生土器の散布が見られた。以下、時代順に記述する。なお、遺構出土の遺物は、個々に明記した。

1　縄文～弥生時代の遺物

縄文土器深鉢　(4・9・27) は体部片である。

(4・27) の体部外面には、ヨコ方向の羽状縄文が施される。その後ヨコ方向に1条の沈線文が入る。(27) の外面は風化がより激しい。器厚は薄い。

(9) は外形は直線的で、口径は大きい。外面にヨコケズリ後粗いタテ方向のミガキが施されている。

弥生土器壺蓋　(1) の外面には放射状にハケメが施されている。

弥生土器壺　(2) は外面にナナメ方向のハケメが施され、その後ヨコ方向の沈線文が施される。

(3・6) は同タイプの貝殻文を施す。上下段の櫛描文に先行してその間に斜格子文が施されているのが特徴的である。ともに風化が激しい。

(5) ナナメ方向のハケ調整の後、上部にヨコ方向のヘラミガキが施されている。

(8) は口縁端部ほど肥厚して、立ち上がり外側に面をもつ。内外面ともにハケメ調整されている。外面には、浮文がつく。さらにV字状の工具痕が観察される。垂下した下端部はナデ調整され、ナナメ方向からのキザミが施される。第III様式の古段階期に相当する[15]。納所遺跡、下之庄東方遺跡でも同タイプのものが見られる。

(10) は広口壺である。頸部から口縁部へと厚みが増し、端部に波状の刺突文を施す。第III様式の新段階期に相当する。

弥生土器甕　(7) は (12) 同様の甕である。内外面ともに粗いハケメが施され、口縁端部はキザミが観察される。

(11) の口縁はやや外反して、肥厚する。内面はヨコハケ調整後に指オサエが施されている。第III様式の範疇である。

(12) はいわゆる「大和型」の甕である。口縁が緩く外反して端部は、引き延ばされて垂れ下がる。細かいキザミメを施す。内外面にはやや粗いハケメを施す。

(13) は口縁が外に強く押し出される。外面にはタテ方向、内面にはヨコ方向の粗いハケメが施されている。

(14) は口縁はヨコナデにより押し出され、端部は垂れ下がる。工具による押圧痕がみられる。

(15) は体部片である。外面にタテハケ調整の後、工具による波状文が施されている。

(16～18) は甕の口縁部である。ともに外面にはタテ方向の粗いハケメが強調され、上端部に突帯が貼りつけられている。内面にも粗いハケメが施されている。(19) と同時期とみられる。

(19) の口縁は立ち上がる。口縁部の外面上部に突帯がつく。

(20) は頸部残片である。外面にヨコ方向の櫛描直線文が施されている。上端に突帯貼りつけ後、指で押圧が施されている。内面は一部、ナナメ方向のハケメが施されている。

(21) は壺の頸部である。櫛描直線文が外面に施されている。内面はヨコナデされている。

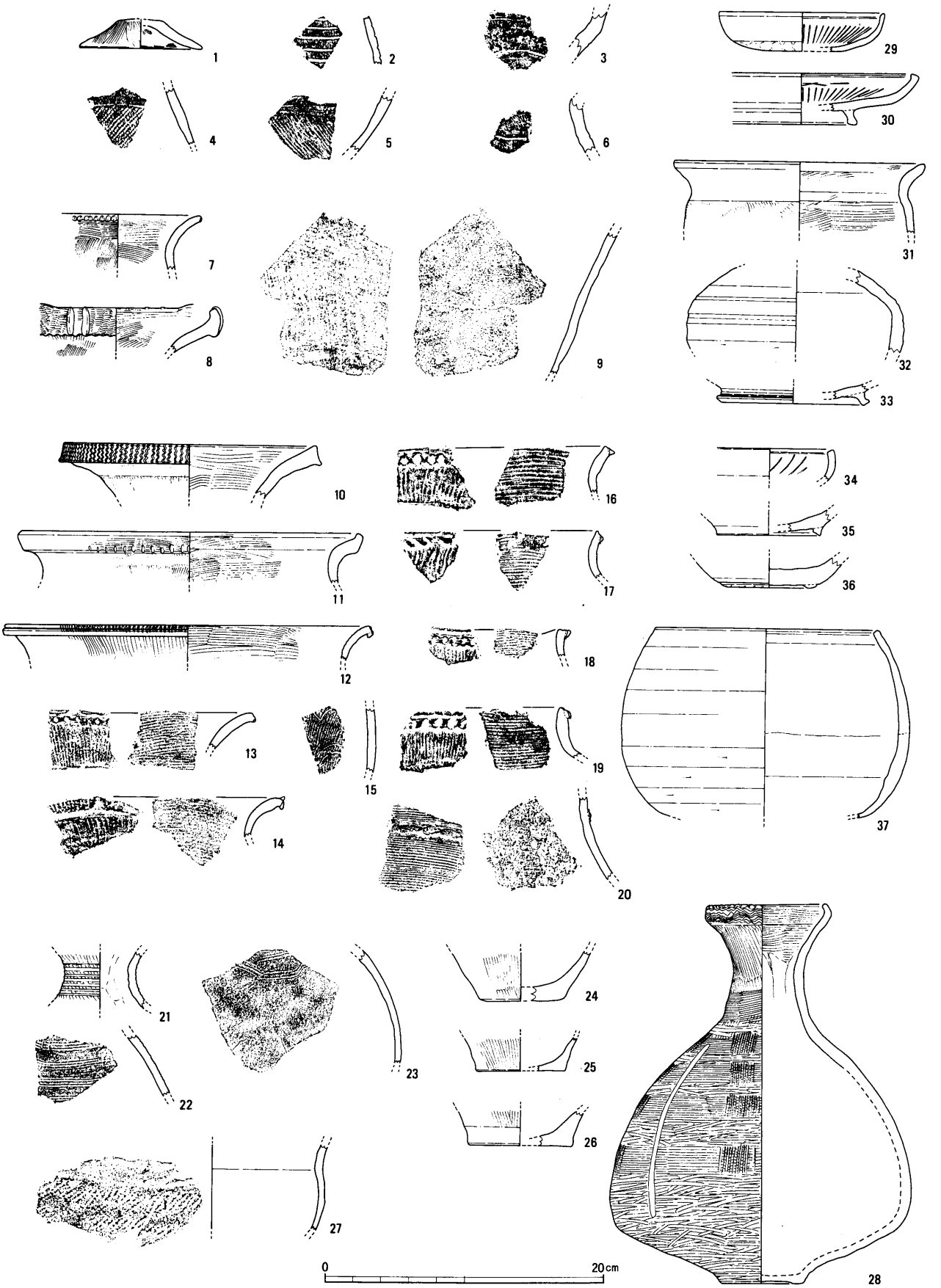
(22・23) の外面にはヨコ方向の櫛描直線文が施されている。

(24～26) は底部残片である。(24・25) の外面のハケ調整は下端部まで及んでいる。

(28) はSK10から出土した完形品である。体部外面の施文が特徴的で、ヘラミガキ後に櫛描横線文が施される。タテ方向に1条のヘラミガキが併せて6本、等間隔に配られている。本例は、一志町鳥居本遺跡[16]、津市納所遺跡[17]、鈴鹿市上箕田遺跡出土の遺物[18]と併行する。

2　奈良時代～中世の遺物

土師器杯　(29・30) は杯A、杯Bである。(29) の底部外面は、オサエ後ナデ調整されている。口縁端部はナデられて、外方に引き出される。若干、丸みを帯びる。内面に施された斜放射状1段の暗文は口縁端部までは及ばない。



第６図　出土遺物実測図　（1：４）

（30）は口縁端部は内傾ぎみに引き出され、丸みを帯びる。高台はヨコナデされ、接地部はやや丸みを帯びる。内面は、口縁端部近くから螺旋状１段の暗文、及び斜放射状１段の暗文が施される。平城編年のⅣ期に相当する[19]。

土師器甕　（31）の体部から口縁にかけてやや肥厚する。端部はヨコナデされ、外反して丸みを帯びる。内面は、全体がヨコハケ調整されている。

須恵器壺　（32）は基部から体部の残片である。内外面ともにロクロナデされている。体下部はロクロケズリが施される。

須恵器杯Ｂ　（33）の高台はロクロナデされ、外方に引き出されて丸みを帯びる。接地部が右上がりになる。

土師器皿Ａ　（34）の底部から口縁にかけてほぼ立ち上がり、内側に稜をもつ。放射状の暗文が施されている。ＳＫ５から出土した。平城編年第Ⅲ段階期に相当する。

山茶椀　（35・36）はともに底部残片である。

（35）の高台は安定している。底部は糸切り未調整である。ＳＤ４から出土した。藤澤編年の第５型式の範疇である[20]。（36）の口縁から身込みにかけての厚みが一定している。高台は貼り付け後ナデている。籾殻痕がみられる。ＳＤ７から出土した。藤澤編年の第６型式に相当する。

須恵器鉢　（37）の同時期の遺物は他に出土していない。口径17.0㎝である。外面の体下半部以下にロクロケズリが施される。

Ⅴ　調査のまとめ

１　弥生時代の遺物について

包含層から出土した小片が多かった。しかし、土器の特徴を観察すると前期から後期に及ぶ土器相であると確認できた。特に畿内第Ⅲ様式の型式を模倣しながら、在地的な形を表現した土器が多数みられた。例えば完形で出土した遺物№28は、櫛描横線文と口縁部に用いた波状文の盛行とヘラミガキを併行しながら頸部以下にハケメを組み合わせた調整方法とっていた。

２　弥生時代・中世の遺構について

今回の調査は面積的に制約をうけたものであったが、弥生時代の土坑１基と中世の掘立柱建物を２棟確認することができた。以下各時代をまとめた。

弥生時代には、①笹遺跡全体が雲出川右岸の段丘平坦面に広がっていたこと、②水利面において各時期好条件であったこと、③昭和31年に笹遺跡（遺跡の西端）の溝状の遺構から磨製石斧等が採集されていること[21]、④和遅野遺跡、亀ケ広遺跡で竪穴住居が多数確認されていること、から住居群、もしくは小規模な集落が形成されていたと考えられる。

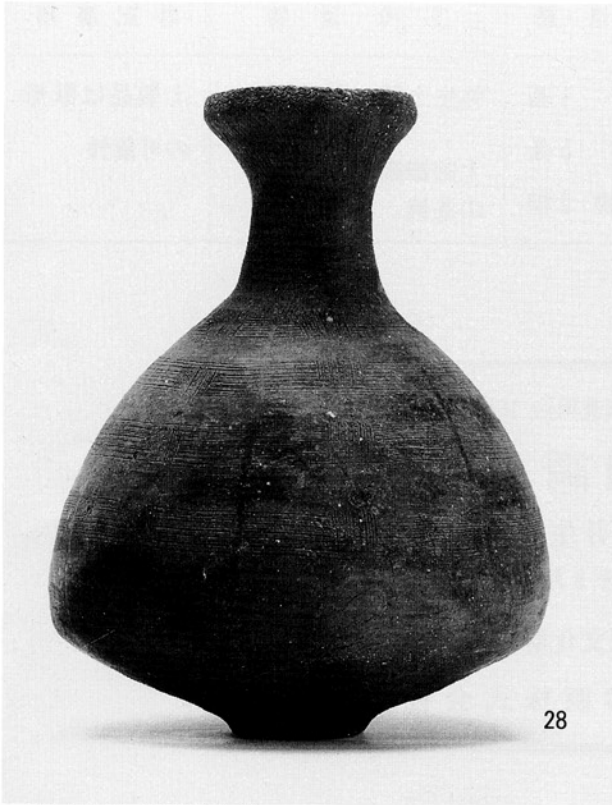
住民の聞き取りから、中世以降は、⑤調査区の南側に古い寺院があり、その周辺に集落があったこと、⑥中世の溝状の遺構から山茶椀、南伊勢系土師器等が出土したことや本調査で関連の掘立柱建物が確認されたこと、から中世にも集落は存在していたと考える。しかし、近世になると現在の井生地区の所在する低位丘陵の南麓に移ったと考えられる。

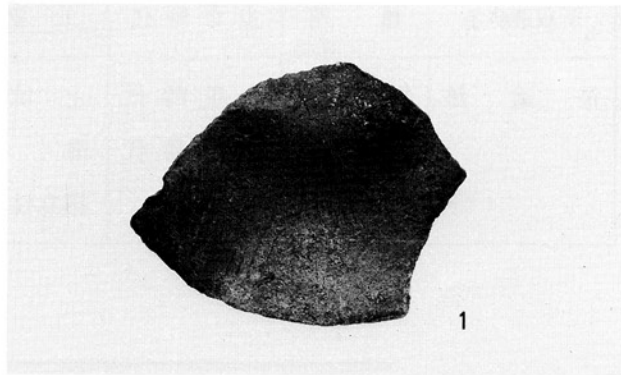
〔註〕
⑤川北秀実他「鳥居本遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊10－』三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター、1992
⑥下村登良男『上井生３号墳発掘調査報告』一志町教育委員会、1971
⑦「古墳時代の遺跡と古墳」『白山町文化誌』白山町教育委員会、昭和48年
⑧「奈良時代の白山地域」⑦に同掲載
⑨小玉道明他『野田浦遺跡発掘調査報告』白山町教育委員会、1971
⑩森川常厚『高寺・寺家遺跡発掘調査概要』三重県教育委員会、1988
⑪伊勢野久好『高寺遺跡発掘調査報告』一志町教育委員会、1991
⑫「古代の交通路」『一志町史』上巻、昭和56年
⑬池上裕子「村の徳政衆」『戦国の群像』日本の歴史10講談社、1985
⑭井生村『三重県の地名』平凡社、 1983
⑮井藤暁子「近畿２～４」『入門講座・弥生土器』考古学ジャーナル、1981～1982
藤田憲司「西日本の弥生土器の文様」『季刊考古学』雄山閣、1987.5
⑯⑤と同掲註
⑰伊藤久嗣『納所遺跡－遺構と遺物－』三重県教育委員会、1980
⑱仲見秀雄他『上箕田』弥生式遺跡第二次調査報告、鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会、昭和45年
⑲「古代の土器２・３」『都城の土器集成』古代の土器研究会、1992
⑳藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第３号』三重県埋蔵文化財センター、1996
㉑笹遺跡出土遺物は現在、小田光夫氏所蔵。

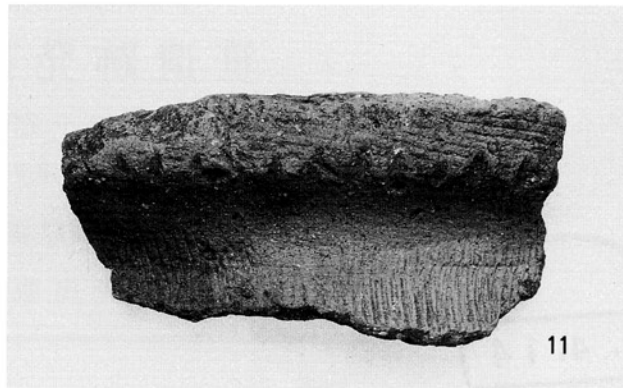
No	登録No	器種	出土位置 遺構	計測値 cm 口径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	001-04	弥生土器 壺蓋	23A 茶褐色土	底径 8.8		外：ナデ、タテハケメ 内：ヨコナデ後ヨコハケ	やや密	並	浅黄橙色	2／3	
2	007-04	弥生土器 壺	13B 包含層			外：斜行ハケメ、沈線文 内：ナデ	やや粗	並	橙色		
3	007-06	弥生土器 壺	10B 包含層			外：格子状ハケメ、沈線文 内：ナデ	粗	並	浅黄橙色		No.6と同一個体か
4	005-06	縄文土器	11A 茶褐色土			外：羽状文（R/R）、ヨコ沈線 内：指オサエ、ナデ	やや密	並	にぶい橙色		
5	007-07	弥生土器 壺	9A 包含層			外：ヘラミガキ、斜行ハケメ 内：ナデ	やや粗	並	にぶい橙色		
6	007-05	弥生土器 壺	9A 包含層			外：格子状ハケメ、沈線文 内：ナデ	粗	並	浅黄橙色		No.3と同一個体か
7	005-02	弥生土器 甕	23A 茶褐色土			外：ヨコハケメ、斜行ハケメ、キザミ 内：ヨコナデ、ヨコハケメ	やや粗	並	にぶい黄橙色		
8	005-01	弥生土器 壺	19A 茶褐色土			外：ヨコハケメ、タテハケメ、浮文 内：ヨコハケメ	やや粗	並	にぶい黄褐色		
9	003-01	縄文土器	20A 茶褐色土			外：横行ケズリ、タテミガキ 内：ナデ、ケズリ	粗	並	にぶい黄色		
10	004-01	弥生土器 壺	13A 茶褐色土	18.0		外：タテハケメ、刺突文 内：ヨコハケメ	やや密	並	にぶい橙色	1／6	
11	004-02	弥生土器 甕	23A 茶褐色土	24.3		外：ヨコハケメ、タテハケメ、ヨコナデ刺突 内：ヨコハケメ、ナデ、指オサエ	やや密	並	にぶい橙色	1／9	
12	002-03	弥生土器 甕	16A・17B P1	26.3		外：タテハケメ、キザミ 内：ヨコハケメ	やや粗	並	にぶい黄橙色	1／8	
13	005-03	弥生土器 甕	26B 茶褐色土			外：タテハケメ、キザミ 内：ヨコハケメ	やや密	並	にぶい橙色		
14	005-04	弥生土器 甕	29B 茶褐色土			外：タテハケメ、ヨコナデ、押圧 内：ヨコナデ、ヨコハケメ	やや粗	並	にぶい黄橙色		
15	005-05	弥生土器 壺	11A 茶褐色土			外：タテハケメ、波状文 内：指オサエ、ナデ	やや密	並	にぶい橙色		
16	007-03	弥生土器 甕	6A 包含層			外：タテハケメ、横沈線文、貼付突帯　内：ヨコハケメ	やや粗	並	灰黄褐色		
17	007-01	弥生土器 甕	11B 包含層			外：タテハケメ、貼付突帯 内：ヨコハケメ	やや密	並	にぶい橙色		
18	007-02	弥生土器 甕	29A 包含層			外：タテハケメ、貼付突帯 内：ヨコハケメ	やや粗	並	にぶい橙色		
19	002-02	弥生土器 甕	18A 茶褐色土			外：タテハケメ、キザミ 内：ヨコハケメ	密	並	にぶい褐色		
20	006-03	弥生土器 壺	24A 茶褐色土			外：櫛描横線文、指オサエ 内：櫛描文？	やや粗	並	にぶい黄橙色		頸部のみ残
21	001-03	弥生土器 細頸壺	13A 黄褐色土	頸径 5.2		外：斜行ハケメ、櫛描横線文 内：ナデ、絞り痕？	やや粗	並	にぶい橙色		頸部のみ残
22	006-01	弥生土器 壺	12B 茶褐色土			外：ヘラミガキ、櫛描横線文 内：指オサエ、ナデ	やや密	並	にぶい黄橙色		
23	006-02	弥生土器 壺	16B 茶褐色土			外：ナデ、櫛描横線文 内：指オサエ、ナデ、工具ナデ	やや粗	並	浅黄橙色		
24	004-04	弥生土器 甕（底部）	23A 茶褐色土	底径 6.0		外：タテハケメ、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	灰色	1／4	
25	004-06	弥生土器 甕（底部）	23A 茶褐色土	底径 6.3		外：タテハケメ、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色	1／4	
26	004-05	弥生土器 甕（底部）	28B 茶褐色土	底径 7.3		外：タテハケメ、ヨコナデ、ナデ 内：ナデ	やや密	並	灰黄褐色	1／4	
27	001-08	縄文土器	13A 黄褐色土			外：ヨコナデ、羽状文（L/R） 内：ナデ	やや密	並	にぶい橙色		
28	009-01	弥生土器 細頸壺	21B SK10	8.4 5.7	27.5	外：キザミ、櫛描横線文、タテミガキ 内：波状文、ヨコハケメ、絞り痕	やや粗	並	にぶい橙色	完存	ミガキ、櫛目文を6帯放射状
29	004-07	土師器 杯	22B 茶褐色土	11.8	2.8	外：ヨコナデ、指オサエ、ナデ 内：ナデ	やや密	並	橙色	1／4	斜放射状暗文
30	004-03	土師器 杯	22B 茶褐色土	18.0	3.7	外：ヨコナデ、ロクロケズリ、ヨコナデ、貼付高台　内：ナデ	やや密	並	にぶい橙色		螺旋状暗文 斜放射状暗文
31	001-01	土師器 甕	22B 茶褐色土	18.0		外：ヨコナデ、タテハケメ 内：ヨコハケメ	密	並	にぶい橙色	1／9	
32	002-01	須恵器 壺	19B 黒褐色土	体径 15.6		外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	並	灰白色		
33	001-05	須恵器 杯	20A 黒褐色土	底径 10.2		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	並	灰色		
34	001-02	土師器 杯	23B SK5			外：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	密	並	橙色		斜放射状暗文
35	001-06	陶器 山茶椀	24A SD4	底径 7.3		外：ロクロナデ、回転糸きり 内：ロクロナデ	密	並	灰白色		
36	001-07	陶器 山茶椀	27B SD7	底径 6.0		外：ロクロナデ、回転糸きり 内：ロクロナデ	密	並	灰白色		籾殻痕あり
37	008-01	須恵器 鉢	21B SK10上面	16.0		外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや粗	並	褐灰色	1／4	

第1表　出土遺物観察表

調査区東半部（西から）







出土遺物（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	ささいせきはっくつちょうさほうこく
書名	笹遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	166－3
編著者名	中川　明
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL 0596－52－1732
発行年月日	西暦　1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
笹遺跡（ささいせき）	一志郡一志町（いちしぐんいちしちょう） 字井生（あざいう）	24403	20	34° 39′ 03″	136° 23′ 13″	1997.11.10 ～ 1997.12.15	410 m²	平成9年度県営土地改良総合整備事業（井生地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
笹遺跡	集落跡	弥生時代 室町時代	土坑　1基 溝　5条 掘立柱建物　2棟	弥生土器　壺（畿内Ⅲ様式） 土師器鍋 山茶椀	土製品は獣形の可能性

平成11(1999)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 166－3

笹遺跡発掘調査報告

－一志町井生－

1999年3月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社